

ベールマンさんのけっ作　　ゝ　オー・ヘンリー「最後の二葉」より　　ゝ

ワシントン・スクエアの西にあるこの一画は、せまい道路がめい路のように入り組んだ所でした。そして、この一画には、いつか世にみとめられることを夢見る芸術家たちが、少しでも安く借りられる部屋を求めて集まり、そこをアトリエにして、暮らしていました。

若い女性画家のジョンシーもその一人です。ジョンシーは、街の食堂で知り合った、同じく女性画家のスーと意気投合し、レンガ作りの建物の三階に共同で部屋を借りることにしました。

その年の十一月、ジョンシーは、ベッドに横たわったまま、少しも動けずにいました。街で流行している肺炎にかかってしまったのです。もう何人も人が亡くなっていました。ジョンシーは部屋の小さな窓ガラスごしに、となりの建物のレンガのかべを見続けるだけの毎日を過ごしていました。

ある朝、ジョンシーのしん察を終えた医者が、スーをろう下に呼んで言いました。

「助かるかどうか……、それは、ジョンシー自身が『生きたい』と思うかどうかにかかっているな。」

スーは、言葉も出ませんでした。

「私は、できる限りのことをするつもりだ。しかし、あのおじょうさんは、自分はよくならないと決めてしまっている。それでは、薬の効きめもなくなってしまうのだよ。」

医者が帰ると、スーは自分の部屋に入って、ハンカチがぐしゃぐしゃになるまで泣きました。

しばらくしてスーは顔をあげると、スケッチブックを持ち、背中をぴんとのばして口笛をふきながらジョンシーの部屋に入っていました。ジョンシーは、顔を窓に向けたまま横になっていました。ねている



のだと思ったスーは、口笛をやめてスケッチブックを開き、たのまれていた雑誌のさし絵をかき始めました。すると、

「じゅうに……じゅういち……。」

そして、しばらくして、

「じゅう……。」

と、ベッドからかすかに声が聞こえてきました。ジョンシーが、窓の外を見ながら、何か数えています。

「きゅう……はち……なな……。」

何だろうとスーが窓の外に目をやると、レンガのかべをはうつたの葉に冷たい風がふきつけていました。「だんだん落ちるのが早くなったわ。三日前は、百枚くらいあったのよ。今も二枚落ちたわ。もう残っているのは、五枚だけね。最後の一枚が散るとき、私もお別れするの。」

「お別れて、何を言っているの。あなたは元気になるのよ。お医者様もそう言っていたわ。さあ、ジョンシー、もうあんな葉っぱは見ないでちょうだい。」

「もうつかれたの。考えるのもやめて、もう散ってしまいたいだよ。あの葉っぱのように……。」

ジョンシーは、大理石のちよう像のように白く冷たい表情のまま静かに目を閉じました。

「もう、ねむりなさい。私は、ベールマンさんのところに行つて、仕事をしてくるわ。すぐにもどってくるから、安心しておやすみなさい。」

ベールマン老人は、下の階に住む画家でした。

「いつか、けっ作をかくのだ。」



と言うのが口ぐせでしたが、今ではほとんど絵をかくこともなく、ベールマンさんのキャンバスは、真っ白なままです。ときどき若い画家のためにモデルをして、わずかばかりのお金をもらって生活していました。気難しいベールマンさんでしたが、上の階に住むジョンシーとスーをととても大切に思っていました。スーは、先ほどのジョンシーとのやり取りを、ベールマンさんに話しました。すると、ベールマンさんは目を真っ赤にしておこったように言いました。

「葉っぱが散ったら死ぬだなんて、そんなことがあるものか。おお、可愛いそうなジョンシー。」

その夜は、一晩中、雪まじりの冷たい雨と激しい風が窓をたたき続けました。

次の朝、雨は上がりましたが、街は重く暗い雲におおわれていました。

スーが目覚ましてジョンシーの部屋に行くと、

「日よけを上げて。外が見たいの。」

と、ジョンシーが弱々しく言いました。

レンガのかべをはうつたの葉は、一枚になっていました。

「これが最後の一枚ね。タベのうちに、散ると思っていたのだけれど。きっと今日、あの葉も散って、私も死ぬんだわ。」

その日、ジョンシーはスーのどんな言葉にも耳を貸さず、ますます弱っていくようでした。しかし、たった一枚残ったたの葉は、まだかべにしがみついていた。

その夜も、北風が雨とともにやって来て、一晩中、窓をたたき続けました。





その日の午後。ジョンシーがベッドで編み物あをしていると、少しうつむきながらスーが部屋に入ってきました。スーは、ジョンシーをそっとだきしめながら言いました。

「ジョンシー……。今日、ベールマンさんが亡なくなったの。二日前の朝、管理人さんが、くつも服もぐっしりぬれて部屋でたおれているベールマンさんを見つけたのですって。そして、あのかべの下には、はしがたおれ、絵の具や筆が散らばっていたそうよ。ねえ、ジョンシー、あの葉っぱを見て。——ああ、ジョンシー、ベールマンさんは本当にけっ作を残したんだわ。あのつたの葉は、ベールマンさんがかいたのよ。最後の葉ひとはが散った晩ばんに。」

「もうだいじょうぶだ。」

次の日、ジョンシーをしん察していた医者と言いました。

夜が明けると空はおだやかに晴れわたっていました。つたの葉はまだそこにありました。ジョンシーは横になったまま、長いことその葉を見ていましたが、やがて、スーを呼んで言いました。

「ごめんなさい、スー。私わたし、まちがっていたわ。葉っぱが、あのたった一枚の葉っぱが、私わたしに教えてくれたの。スー、私わたし、早く元気になって、いつか私の夢ゆめの、あのナポリの海の絵をかくわ。」

【参考資料】「最後の葉」オー・ヘンリー 訳 大津 栄一郎 岩波書店

(櫻井 秀子 作)